

## プロの翻訳者になるために —翻訳スクールの講師をされていて思うこと—

宇賀治 潔

### はじめに

大阪の大手の翻訳会社である(株)アデプト社が併設している、翻訳学校アデプトコミュニケーションスクールで、私は開校以来7年間講師をしています。そこでの経験から、翻訳学校とはどんなところかということから始めて、翻訳者を養成することの難しさを中心に、いろいろと書いてみたいと思います。

大阪工業英語研究会のような自主的なサークルと翻訳学校とを比べてみると、会員あるいは生徒側から見ると技術英語を勉強しようということではほぼ同じですが、組織の側から見るとその目的や方法が微妙に違います。このため、翻訳の勉強をされている皆さんに関連や興味のあることもあればそうでないこともあると思います。これから翻訳の勉強をしようとしている人、あるいはそういう人達を指導しようとしている人の参考になればと思います。

## 1. アデプト・コミュニケーション・スクールについて

### 1.1 設立のいきさつ

スクール設立のいきさつは、新しくできた翻訳会社アデプト社が必要とする翻訳者を確保する上で、一般から募集してもなかなか優秀な人が集まらず、それならいっそ自前で養成してはどうかということでした。現在アデプト社で働いている翻訳者は一般から募集した人もいますが、大部分はスクールの卒業生であり、設立のいきさつからすれば当初の目的は一応達成されています。

### 1.2 期間と費用

今年の秋から変更になりましたが、そ

れまでの7年間は基礎科(6ヶ月)、本科(6ヶ月)、専科(マニュアル、コンピュータ、メデイカル、特許のうちの2つで1年間)、研修科(6ヶ月)の構成でした。生徒は週2回スクールに来ました。(1回の授業は105分)。基礎科から入学した場合、卒業まで期間は2年半、費用は約100万円かかりました。ここでスクール側から見て問題となったのは、これだけの期間と費用をかけて果たして本当に翻訳者を養成できているのかということでした。厳しい見方をすれば、スクールができたことは翻訳者の養成ではなく、単に素質のある人を見つけたに過ぎなかったのかも知れません。

### 1.3 カリキュラム

スクールのカリキュラムを決める場合、スクールの本来の目的を先ずははっきりさせ、その目的を達成するためには、何をすれば最も効果的かを考えるのが道筋だと思います。スクールの本来の目的は、アデプト社の人材の確保や営利(副次的な目的)ではなく、翻訳者の養成にあります。しかし、何をすれば最も効果的かは開校当時は誰も知りませんでした。しかし、とにかくやってみよう、問題点は出てきた時点で解決して行こうということになりました。

そこで、とりあえず大学の教養課程と専門課程にならって、教養課程(基礎科と本科)では翻訳一般に必要な英語力の養成、専門課程(マニュアル、コンピュータ、メデイカル、特許)では各分野に特有な用語、表現、技術知識の習得、そして最後の総仕上げとして研修科で実際にアデプト社が行っている分野の翻訳をアデプト社が求める品質で翻訳できるようにアデプト社の翻訳責任者(スクールの講師ではなく)が指導す

る (on-the-job training を含む) というカリキュラムでスタートしました。そして、何ら変更を加えることなく、このままの方法で7年間で過ぎてしまったのです。

#### 1.4 成果

副次的な成果はさておき、本来の目的は十分達成されたとは言えません。1クラスに7人の生徒がいたとして、卒業時に、下訳ならまかせても大丈夫な程の翻訳力を持っている人は、せいぜい2人です。そしてそういう実力のある人も、スクールで学んだから実力がついたと言うより、最初から良くできる人だったと言えるのです。

#### 1.5 生徒の不満

ほとんどの生徒は将来プロの翻訳者になるためにスクールにきています。また、スクールのパンフレットには優秀な卒業生は翻訳者としてアデプト社に登録されるとも書いてありました(今年の秋から方針が変わって、このようなことは現在はパンフレットには書かれていません)。スクールを優秀な成績で卒業したとしても、それは下訳ならできる程度の実力であり、当然実際の翻訳作業をしながらの先輩の指導が不可欠です。卒業生に任せることのできる(内容がやさしくて納期の長い) 翻訳需要は少なく、また卒業生の面倒を見る人もいないということで、結局、生徒の不満は、卒業後の面倒見が悪いということが第1です。しかしこの不満は直接スクールに対してのものではありません。

スクールに対する不満としては、カリキュラムに一貫性がない。講師によって言うことが違う。完成したテキストがない、添削してもらえない機会が少ない、教材の選択が悪い、宿題の量が少ない(あるいは多い)、進度が遅い(あるいは速い)、実際の翻訳に直ぐ役立つ知識をもっと教えて欲しいなどです。スクール発足当時からスクールには確固たるポリシーがなかったのですから、何を教える

かは結局講師にまかされたわけで、このような不満が出るのは当然と言えば当然でした。

## 2. 難しい翻訳者の養成

### 2.1 重要な三つのポイント

翻訳者の養成に限らず、人を教育することは難しいことです。世の中全般を見ても、教育は必ずしも成功しているとは限りません。たとえば、英会話学校はたくさんありますが、そこに行って英会話ができるようになったということは余り聞いたことがありません。家庭や学校での子供の人間教育も必ずしもうまく行ってはいません。何事を達成するにも、まず(1) 目的をはっきりさせること、(2) 問題がどこにあるかを十分に分析すること、そして(3) 最も効率の良い方策をたてて実施することが必要ではないでしょうか。

そこで、翻訳者を養成するためには、(1) 翻訳者になるためにはどのようなことが必要か、(2) 翻訳者になろうとしている人にどんなことがかけているのか、そして(3) 必要なことと欠けていることとのギャップをどのようにすれば最も効果的に埋めることが出来るのかが分かっている必要があります。

### 2.2 翻訳者になるには何が必要か

翻訳者になるためには、英語ができることと専門分野の知識があることが必要であると多くの人は言います。アデプトコミュニケーションスクールでもそう考えて英語教育と専門教育の2本柱でカリキュラムをたてました(ただし英語教育の方が中心)。しかし、結論から言うと、専門教育の方は失敗でした。教える側から言うと、数ある専門分野の中から何を選んでどの程度の深さまで教えたらいかが分かりません。学ぶ側から言うと、興味のないことや難しいことはどうしても熱心になれません。教育の効

果という面から考えても、専門教育の効果は目に現れる形ではっきりと分かるものではなく、また、翻訳者になれてからでも遅くはないということもあります。そこで、今秋からの新しいカリキュラムでは技術教育がなくなりました(ただし、メデイカルと特許のクラスはあります)。そうすると、翻訳者を養成するうえでは、やっぱり英語ができるようになることが一番大切ということになります。

### 2.3 基本となる英文読解力

一般には英語ができるとは英語がペラペラしゃべれることですが、こと翻訳に関しては、しゃべれるということはそれほど重要ではありません。英語ができるとは読み書きが自由にできることと言えるでしょう。英語が書けるためには英語が読めなければなりません。したがって、英語力の基本は英文読解力であると思われる。スクールの生徒の中には英語を自由に話せる人が多くいます。海外留学の経験のある人はざらですし、通訳をしている人やアメリカの大学院を卒業した人さえいます。しかし、それらの「英語のできる人」も、普通の人と比べて特に読解力が優れているとは言えません。たぶん、英文読解力は、英語が良くできる人もあまりできない人もそれほど変わらないのではないのでしょうか。

しかし、このように「日本人は英文読解力が欠けている」と言えば、反対の人も多いかと思えます。なぜなら、一般には、「日本人は読み書きはできるがしゃべれない、したがって英語教育ではもっと英会話を重視しなければならない」というのがここ数十年来の「新しい」考え方なのです。しかし、読み書きができるといっても、しゃべれることに比べればという比較論でしょうし、翻訳に必要な程の読解力を、翻訳を志す大部分の人が持っていないことは、スクール講師の一致した意見なのです。また、どんな

英文も、適切な辞書と時間さえあれば和訳できるという人もおられると思いますが、訳せることと内容が理解できることとは違うのです。一応訳したが内容はよくわからなかったということが多いのではないのでしょうか。また、本来翻訳とは、内容が理解できないとしてはならないものはずです。原本の内容を理解できることが読解力ですので、やっぱり読解力が英語の基本です。

### 2.4 翻訳者の養成はどうすればよいか

翻訳者になるには読解力が必要であり、また、翻訳者になろうとしている人に読解力が欠けているとすれば、後はどうすれば効率的に読解力を高めることができるかを考えればよいこととなります。読解にはまず英文法の完全な理解と、さらには推論(推理)できる能力とが必要です。ここでいう英文法とは、学校文法を発展させて、どのような英文にも適用できるようにまで完成度を高めた実用的な英文法のことで、またここでいう推論とは、キーワードとキーワードの関係を合理的に関連づける、修飾語句の掛かり具合を認識する、文章の流れを読み取る、筆者の言いたいことやロジックを理解するなどの能力のことで、思考力とも言えるものです。

しかし読解力を高めるためのテキストを用意するというになると、学校文法を越える文法書は残念ながらこの世には存在せず、また、推論の必要性は私が提唱しているに過ぎずまだ方法論までは確立できていません。このため、現在はアデプトコミュニケーションスクールで、文法と推論に重点を置きながらも手探りの状態で授業を進めています。成果の程はまたの機会に報告したいと思えます。

### 2.5 英語力＝翻訳力 といえるか

ところで、英語力＝翻訳力でしょうか。もしそうであれば、英語力がほぼ読解力

であるとして、読解力＝翻訳力になりますが、これは少し違うと思います。読解力は自分が分かればよい。つまり自分だけの問題ですが、翻訳はそれを他人が読んで分からなければ意味がありません。つまり翻訳力には、読解力プラス表現力（他人が読んでみて分かりやすい文章を作る能力）が必要です。したがって、仮に英語力（読解力）があっても翻訳力があるとは限らず、翻訳力という特殊な能力を持っている人こそがプロとしての翻訳者なのです。

翻訳者を養成するという事は翻訳力を養成することなので、英語力の備わった人に対して、表現力をつけさせることこそが本来スクールの役目のはずですが、その前提となる英語力の備わった人というものがいない以上、まず英語力を養成することに主眼を置かざるを得ません。そしてこのことだけでも大変難しいことであり、このことにどのスクールもまだ成功していないのではないのでしょうか。

### 3. 大阪工業英語研究会のこと

#### 3.1 本会と翻訳スクール

研究会の会員も翻訳スクールの生徒も、ともに翻訳が上手になりたいと思っています。しかし、属している組織が異なるため、勉強の方法は異なっています。しかし、研究会での勉強方法とスクールが本来めざすべき授業方法とは本質においては同じであると思います。

#### 3.2 指導者に恵まれた本会

研究会は水上セミナーとグループ研究会の2本立てになっています。水上セミナーは和文英訳中心で、その目的とするところは、水上先生の添削指導の下で、英文法のブラッシュアップや英語的な発想、表現を学ぶことです。スクールの目的は翻訳力の養成であり、翻訳力＝英語力＋表現力とすると、これに英語力＝読解力＝文法＋推論＋表現力となって、スクールの目的と研究会の目的とがよく

合致します（英語的な発想を学ぶことは推論や思考力を高めることなしには不可能です）。また、グループ研究会は主として英文和訳で、その目的とするところは英文の読解力と日本語での表現力の向上です（どちらに重点を置くかは意見の分かれているところですが、両方が必要であることについては一致しています）。したがって、グループ研究会の目的もスクールの目的も同じと言うことになります。

研究会と翻訳スクールとを比べてみると、研究会では息の長い勉強をしており、短期間に勉強の効果が出なければならぬということはありませんが、スクールにはタームがあってその期間中に一定の効果を出さなければならぬという命題があり、運営上の難しさがあります。研究会は水上先生という優れた指導者に恵まれ、ラッキーでした。水上先生のご協力がなければ、研究会そのものが存続していなかったでしょう。スクールでは、私も含めて、翻訳力は生徒よりは少しはまし程度の者が講師をしているので、どの講師も一生懸命努力はしていますが、講師の質という面で生徒にとってはアンラッキーです。

#### 3.3 互いの協力関係はできないか

そこで、研究会と翻訳スクールとが互いによい協力関係を持つことが出来ないかということでは私の話を終わらせたいと思います。東京では、翻訳スクールであるフェローアカデミーの卒業生が技術英語研究会に入会するというように、よい関係が出来上がっていると聞いています。大阪でも、限られた期間のためにスクールで達成できなかったことを研究会でじっくり達成して行くというふうになればと思います。研究会の側から見ればあまりメリットはないかも知れませんが、ベテランが新人を指導するという事を通して、長年勉強してきたことを多少なりとも社会に還元すべ

きではないかと思うのです。もちろん、新人とは、翻訳スクールの卒業生に限定されるのではなく、英語が好きで将来翻訳家になりたいすべての人のことです。具体的には、グループ研究会での午前の時間を新人の教育にあてて欲しいというのが私の希望です(現在実験的にこのことを行っています)。■